

会津方言の疑問文に於けるイントネーションと終助詞の関係*†

ギンズバーグ・ジェイソン、ウィルソン・イアン、金子恵美子、小笠原奈保美

本研究は、福島県の会津方言における疑問文の文末のイントネーションの変化を分析することを目的としている。会津方言話者からデータを収集し分析した結果、文末のイントネーションが下がる場合が多く、下降調の場合は上昇調の場合より終助詞を使う可能性が高いことが分かった。

会津方言は消滅危機方言であり、言語学の立場からの会津方言の疑問文の研究は、私たちが知っている限り、行われたことがない。そのため、ギンズバーグら（2013）に続いて、本研究は会津方言の疑問文の実態を明らかにすることを目的としている。本研究では主に年配者（60代～90代）の会津方言話者を対象に、発話を促すような構造的データ収集を行った。調査方法として、標準語や会津方言の単語を使った文章が書いてある紙を被験者に見せ、その文章を会津方言ならどのように言うかを尋ね、参加者の発話を録音した。47名（平均年齢74歳）のデータを収集し、その多くをデータベースに取り込んだ。データベースには各被験者の方言に影響を及ぼす可能性の高い情報（地域、年齢、性別）、被験者から収集された文章の書き起こしデータ、録音、録音のピッチトラック、文末のイントネーションの説明（イントネーションが下降調か上昇調か）が含まれている。また、データ分析のため、データベースから下降調と上昇調の比率等有効と思われる情報をプログラミング言語 Python を用いて抽出している。データベース（図1）は、すでにインターネット上で公開されており¹、本論文ではその一部のデータの特徴を紹介する。

本論文の構成は以下の通りである。第2節では、疑問文の文末イントネーションの下降調データを紹介する。第3節では、疑問文の文末イントネーションと終助詞について考察する。最後に第4節で本論文の内容をまとめる。

* 次の方々の研究協力に対して感謝を表す：五十嵐近子、本名公平、土井輝正、阿部友亮、岡田純、橋本有理香、金田淳、そして会津方言のデータ収集に参加して頂いた会津出身の方々。

† 本研究は平成24年度財団法人福島県学術教育振興財団助成金と平成24年度会津大学の競争的研究費から助成を受けている。

¹ <http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~jginsbur/AizuBenDatabase/index.html>

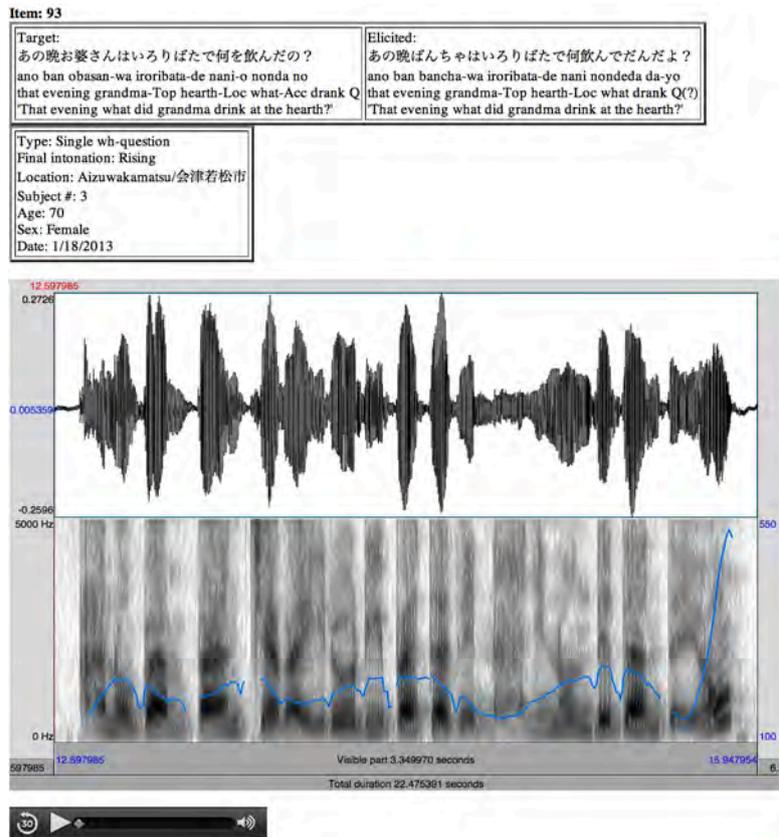


図1：会津方言データベースのスクリーンショット

2. 疑問文のイントネーション

会津方言話者から収集された疑問文の中に、下降調になるものが見受けられた。図2、3は、会津方言話者から収集された疑問文のピッチトラックを示している。これらを見ると、文末は明らかに下降調になることが分かる。疑問文が下降調になる割合は話者によって異なるが、下降調の疑問文の方が多くの話者もいる。現段階では断定はできないが、会津方言の疑問文は、基本的に上昇調になる標準日本語の疑問文（木部2010）と異なるように見える。

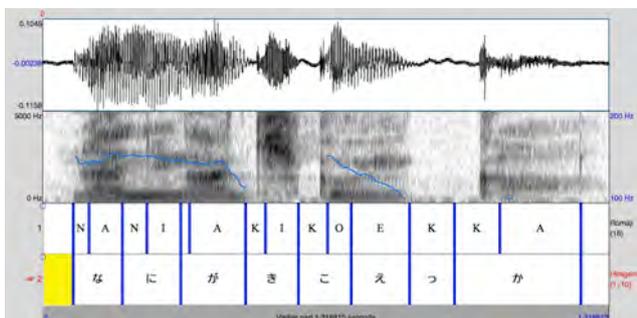


図2：94歳の男性（猪苗代）疑問詞疑問文「なにが聞こえか」（Subject 1: Item 4）²

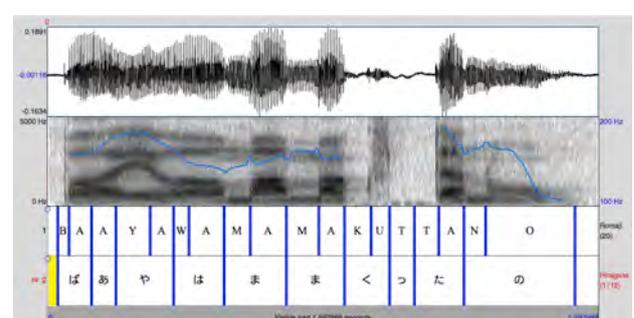


図3：95歳の女性（会津若松市）肯否疑問文：「ばあやがはまま食べたの」（Subject 4: Item 18）

94歳の猪苗代在住の男性から収集されたデータ（表1）によると、ほとんどの疑問

² Subject 番号と Item 番号は、それぞれ被験者と文章番号を示し、これらの番号によってデータベース内の検索が可能である。

文は上昇調になるが、疑問詞疑問文に関しては下降調になる場合が珍しくない。肯否疑問文53文中1文しか（約2%）下降調にならないが、疑問詞疑問文の場合57文中13文（約23%）が下降調になる。この被験者から収集された下降調の疑問詞疑問文のピッチトラックを図2に示す。

95歳の会津若松市在住の女性から収集されたデータ（表2）の場合、ほとんどの疑問文が下降調になる（肯否疑問文は10対4、疑問詞疑問文は9対5で下降調）。図2は同じ話者から収集された下降調の肯否疑問文である。

	上昇調	下降調
肯否疑問	52	1
疑問詞疑問	44	13

表1：94歳の猪苗代在住の男性の文末 (Subject 1)

	上昇調	下降調
肯否疑問	4	10
問詞疑問	5	9

表2：95歳の会津若松市在住の女性の文末 (Subject 4)

疑問文の多くが下降調になる被験者とならない被験者が存在する。72歳の会津若松市在住の男性の場合（表3）、ほとんどの肯否疑問文と疑問詞疑問文は下降調になり、上昇調になるのは一例だけである。また、75歳の会津若松市在住の男性から収集された疑問文も多くは下降調になる（肯否疑問文は3対1、疑問詞疑問文は7対2で下降調）。一方、70歳の会津若松市在住の女性（表3）の場合、肯否疑問文は19対4、疑問詞疑問文は30対9で上昇調になる。

	上昇調	下降調
肯否疑問	0	4
疑問詞疑問	1	2

表3：72歳の会津若松市在住の男性の文末 (Subject 8)

	上昇調	下降調
肯否疑問	1	3
疑問詞疑問	2	7

表4：75歳の会津若松市在住の男性の文末 (Subject 12)

	上昇調	下降調
肯否疑問	19	4
疑問詞疑問	30	9

表5：70歳の会津若松市在住の女性の文末 (Subject 3)

このデータによると、疑問文は下降調が無標イントネーションとまでは言えないまでも、下降調になる場合は決して珍しくない。また、話者によって、下降調の疑問文の頻度が異なるようにも見える。

3. 疑問文のイントネーションと終助詞

日本語の疑問文では、終助詞の使用が必須ではない。収集された疑問文のデータ分析によると、上昇調の疑問文では終助詞が使用されないことが多く、下降調の疑問文では終助詞が使用されない場合の方が珍しい。つまり、下降調の疑問文においては、終助詞の使用が無標であるように見える。

94歳の被験者の疑問詞疑問文では（表6）、下降調になる13文中の9文（約69%）

に終助詞が付いているのに対して、上昇調の場合、44文中25文（約57%）にしか終助詞が付いていない。図4、5はこの話者から収集された疑問詞疑問文（標準日本語「何がいますか」）のピッチトラックである。図4（「何がいます」）には終助詞がなく、文末は上昇調になるが、終助詞の「か」で終わる図5（「何がいますか」）では、文末は下降調になる。

95歳の被験者（表7）の肯否疑問文が下降調になる場合、10文中7文（約70%）に終助詞が付いているのに対して、上昇調の場合、4文中1文（約25%）のみに終助詞が付いている。疑問詞疑問文では、下降調のすべての文に終助詞が付いているのに対して、終助詞の付いていない上昇調の文がある。図6、7はこの話者から収集された肯否疑問文（標準日本語「爺様、婆様はご飯を食べましたか」）のピッチトラックを示す。終助詞が付いていない図6の場合、イントネーションは上昇調になり、終助詞が付いている図7では、イントネーションは下降調になる。

	上昇調する	下降調
肯否疑問	52（終助詞あり:36）	1（終助詞あり:1）
疑問詞疑問	44（終助詞あり:25）	13（終助詞あり:9）

表6：94歳の猪苗代在住の男性の文末 (Subject 1)

	上昇調	下降調
肯否疑問	4（終助詞あり:1）	10（終助詞あり:7）
疑問詞疑問	5（終助詞あり:4）	9（終助詞あり:9）

表7：95歳の会津若松市在住の女性の文末 (Subject 4)

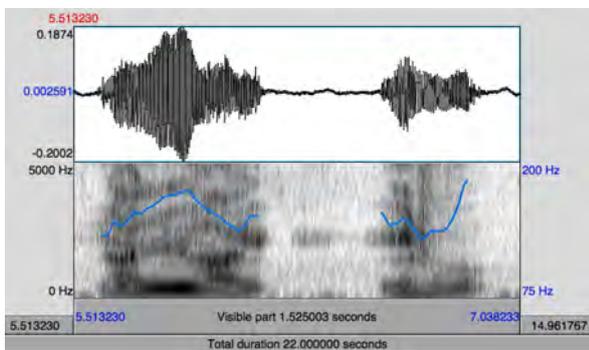


図4：95歳の（猪苗代）疑問詞疑問文「何がいます」 (Subject 1: Item 5)

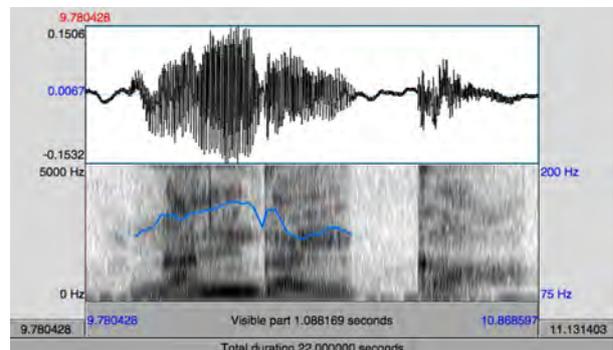


図5：94歳の男性（猪苗代）疑問詞疑問文:「何がいますか」 (Subject 1: Item 7)

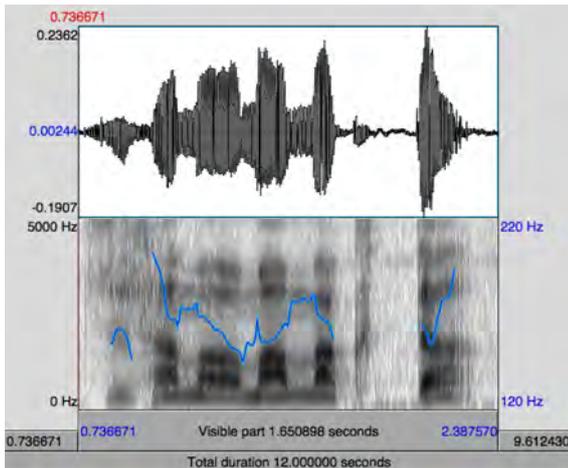


図6：95歳の女性（会津若松市）肯否疑問文「爺様はまんま食った」（Subject 4: Item 16）

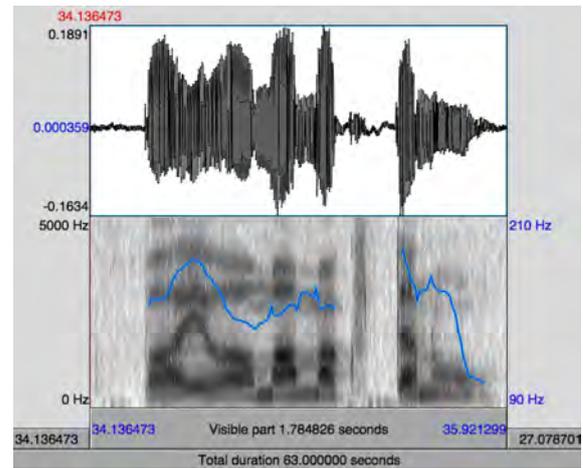


図7：95歳の女性（会津若松市）肯否疑問文「婆やはまんま食ったの」（Subject 4: Item 18）

72歳の会津若松在住の男性（表8）の例では、下降調になる6文中、終助詞が付いていない文は一つだけである。

75歳の会津若松市在住の男性の場合（表9）、すべての下降調になる文に終助詞が使用されているのに対して、上昇調になる疑問詞疑問文に終助詞が付いていない文がある。図8、9はこの話者から収集された疑問詞疑問文である。終助詞が付いていない場合（図8）、イントネーションは上昇調になるのに対して、終助詞が付いている場合（図9）、イントネーションは下降調になる。

	上昇調する	下降調
肯否疑問	0	4（終助詞あり:4）
疑問詞疑問	1（終助詞あり:1）	2（終助詞あり:1）

表8：72歳の会津若松市在住の男性の文末（Subject 8）

	上昇調	下降調
肯否疑問	1（終助詞あり:1）	3（終助詞あり:3）
問詞疑問	2（終助詞あり:0）	7（終助詞あり:7）

表9：75歳の会津若松市在住の男性の文末（Subject 12）

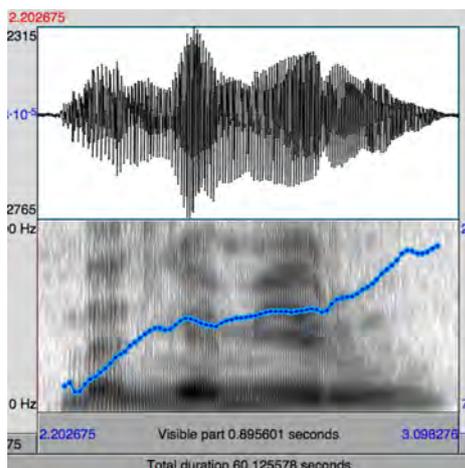


図8：75歳の男性（会津若松市）疑問詞疑問文「何が見える」（Subject 12: Item 5）

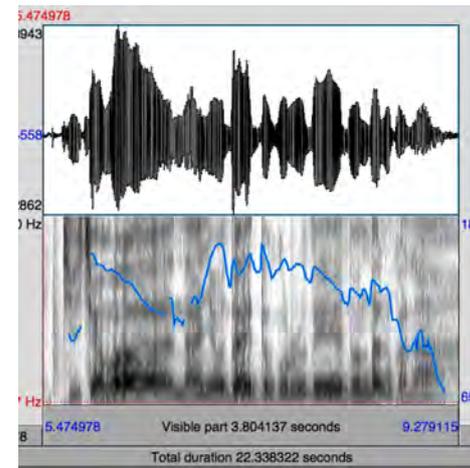


図9：75歳の女性（会津若松市）疑問詞疑問文「爺ちゃんは何を台所で飲んだのかな」（Subject 12: Item 13）

疑問文が下降調になる場合、終助詞を付ける場合が多いのはおそらく肯定文（下降調）と区別するためであろう。17人の会津方言話者から収集されたほとんどの肯定文は、下降調になる（表10）。一般的に肯定文は下降調であるため、疑問文が下降調になる場合、終助詞を付けることで疑問文であることが聞き手にとって分かりやすくなると仮定できる。一方、疑問文が上昇調になる場合、終助詞を付けなくても疑問文であることは伝わる。

	上昇調	下降調
肯定文	74	193

表10：会津方言話者17人から収集された肯定文

4. まとめ

本論文で示したデータには、次の傾向が見られる。

- 1 会津方言では、疑問文（肯否疑問文と疑問詞疑問文）の文末が上昇調になる場合と下降調になる場合がある。
- 2 その割合は話者によって異なり、ほとんどの疑問文が下降調になる話者も上昇調になる話者も存在した。
- 3 疑問文が下降調になる場合、終助詞を付ける場合の方が付けない場合より多く、終助詞の使用が無標と思われる。

収集されたデータに関して、様々な課題がまだ残っている。本論文で紹介したデータは疑問文と仮定されたが、本研究者が意図したとおりに疑問詞疑問文、肯否疑問文が引き出されたのかは定かではない。どのような疑問文なのか正確に知るために、統語構造を調べる必要がある。例えば疑問文と思われる文構造をよく分析すると、その文は純粋な疑問詞疑問文や肯否疑問文ではないことが明らかになる可能性がある。また、本研究のデータ収集方法が、紙面で見せられた文章を会津方言で言い直すというやり方であったため、被験者にとって不自然な部分があり、収集されたデータが実際の会津方言をどの程度正確に反映しているかも不明である。会津方言話者は次第に減少し、方言の存続が危機的状況にある。本研究での被験者も標準語など他の方言に強い影響を受けている可能性があり、その影響もデータに反映されている可能性が高い。今後、上述したような研究上の問題点をできるだけ解決し、より多くのデータの収集・記録・一般への開示、より正確なデータの分析を通して、会津方言の存続に貢献する多くの研究成果が求められる。

参考文献：

- 木部暢子（2010）「イントネーションの地域差—疑問文のイントネーション」小林隆、篠崎晃一（編）『方言の発見 知らざる地域差をしる』1-20. 東京：ひつじ書房。
- ギンズバーグ ジェイソン、ウィルソン イアン、金子恵美子、小笠原奈保美（2013）「会津方言の疑問文の音声特徴」『日本方言研究会第96回研究発表会発表原稿集』9-16.